

世界遺産に向けて

富山県は、2007年に「立山・黒部 防災大国日本のモデル—信仰・砂防・発電—」を世界文化遺産候補として提案しました。文化庁からは「特に砂防の提案に大変見るべきものがあり、発想も新しい」との評価とともに、「その評価が世界的に検証され確立されるよう研究、努力するとともに、国の文化財指定を進めること」という課題が示されました。

県は立山砂防を中心に、砂防堰堤の構造型式の調査など、立山・黒部地域の資産的価値の充実に努めました。その結果、2009年には、白岩えん堤が砂防施設として日本初の重要文化財に指定されました。2017年11月28日には、白岩えん堤に、泥谷えん堤と本宮えん堤を加えて「常願寺川砂防施設」として国の重要文化財に指定され、同年12月7日には、上記の3えん堤に立山砂防工事専用軌道も加えて日本イコモスが選定する日本の20世紀遺産・20選「立山砂防施設群 水系一貫の総合的砂防システム」に選ばれました。

日本の20世紀遺産・20選「立山砂防施設群 水系一貫の総合的砂防システム」

国指定重要文化財「常願寺川砂防施設」



世界遺産に向けて

もうひとつの土木遺産、県営砂防施設



かなやまだにさんぶくこう
金山谷山腹工

明治 39 年から大正 14 年までの県営砂防時代に築かれた山腹工で山腹石積工 8 段と水路石張工 2 カ所が平成 19 ~ 20 年の調査で確認されました。金山谷山腹工は高さ 1 m、延長が 60 ~ 130m で現在でも土留工としての効果を発揮しています。



西五ノ谷の水路石張工と石積みえん堤

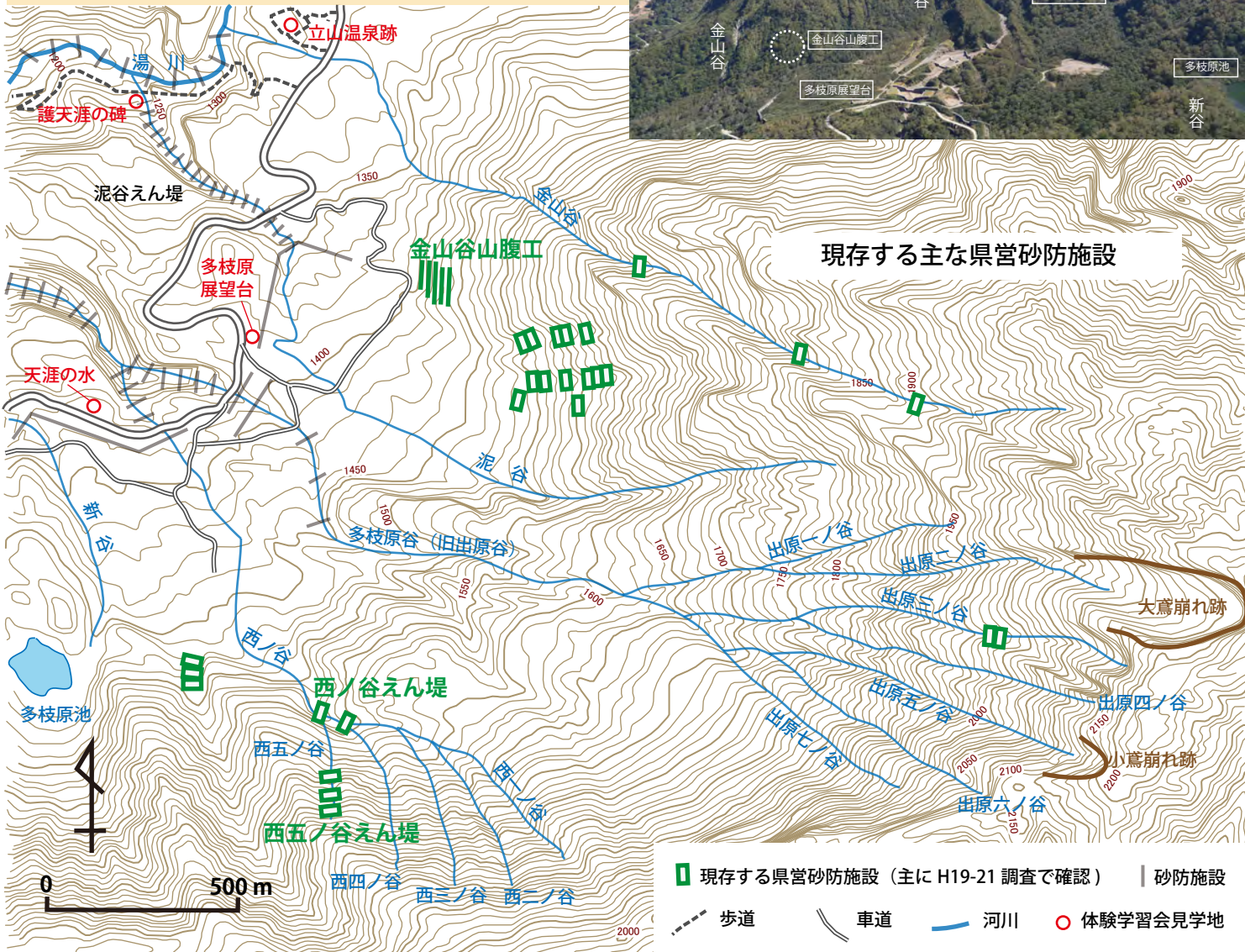
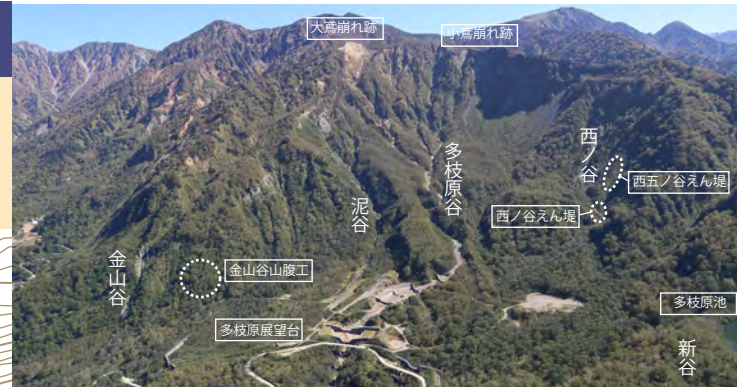
西ノ谷でも多数の石積みえん堤や水路石張工の現存が確認されました。

■県営砂防

立山カルデラでは、内務省による直轄砂防事業開始前の 1906（明治 39）年から 1925（大正 14）年の 20 年間、富山県が砂防工事（県営砂防）を実施していました。20 年間に築かれた石積みえん堤をはじめとした砂防施設は、土石流によりその多くが流出したと言われてきました。しかし、一部の砂防施設は急峻な斜面に現存しており、現在でも土砂災害抑止に効果を発揮していることが近年の調査により分かってきました。

世界遺産へ向けて

明治 39～大正 14 年の県営砂防では、鳶崩れ跡周辺の谷筋を中心に 330 を超える地点で砂防工事が行われました。近年の調査により 100 年を超えた現在でも 50 近くの砂防施設が現存していることが確認されています。今後は貴重な土木遺産としてアピールしていく予定です。



現存する主な県営砂防施設

- 現存する県営砂防施設 (主に H19-21 調査で確認)
- 砂防施設
- 歩道
- 車道
- 河川
- 体験学習会見学地